

「つながり合う力」の育成に向けた小学校国語科における 児童の主体的・対話的で深い学びの充実

指導主事 岩本 龍二

研究協力員 八代市立金剛小学校 教諭 熊 智美

1 研究主題について

八代市立金剛小学校の学校教育目標は、「育ち合い、成長し合う集団の育成」である。二つの分校の児童が、4年生への進学と同時に本校に集い学ぶようになるという特色を持っている金剛小学校では、横のつながりを重視した学校教育目標となっている。その上で、特に重視したい姿が、この地域で学んでよかったと絆を深め、互いに育ち合う姿であった。

このことから、本研究における「これからの社会に求められる資質・能力」を校長、協力員との協議のもとで「つながり合う力」と設定した。さらに、児童の「つながり合う力」を身に付けた姿についての概念を見取るために自由記述式の質問紙調査を行った。そこで、「自分の考えを言う」「友達の考えを聞く」「友達と助け合う」の三つを「つながり合う力」を身に付けた具体的な姿の要素として設定し、それぞれの要素の変容について検証を図ることとした。

2 研究の視点

今回、小学校国語科では、児童の「これからの社会に求められる資質・能力」として設定した「つながり合う力」の育成に向け、「主体的・対話的で深い学び」を充実させることに取り組んだ。この取組について、三つの視点から述べることとする。

(1) 視点1「学びを引き出す」について

単元計画を構想する段階において、学習内容として取り上げる話題自体が社会の役に立つという「社会に開かれた教育課程」の側面の一つを取り入れることで、目的意識や相手意識を高めることができる考えた。そこで、目的意識や相手意識を高める「単元を貫く言語活動」を設定し、単元を貫いて課題意識を継続させることとした。

また、毎時間、何について学ぶのかを明確にするために、課題やポイントを焦点化して示す「問い」の工夫により、協働して解決に向かう学習活動を生むこととした。

これらの取組によって、目的意識や相手意識を高

め、課題解決的な学習過程の中で、主体的・対話的で深い学びが充実することを目指し、児童の「学びを引き出す」手立てとした。

本単元においては以下の取組を行う。

- ① 地域の問題を発見し、提案書によって学校生活の改善を図るという課題の解決を通して、目的意識や相手意識を高める。
- ② 毎時間、例示した中から選んだり、賛成か反対かという判断を促したりすることによって課題を焦点化し、他者との協働を通じた学習になるようにする。

(2) 視点2「学びを振り返る」について

授業場面において、児童が考えを持つことは、その後の協議を深めるだけでなく、協議後に考えの変容を振り返ることにおいても大変重要である。その変容を振り返ることがメタ認知を促すこととなり、他の学習に転移できる汎用的能力として国語の力が高められる。

そこで、本研究では、児童が考えを持ったり、他者と協働的に学んだりする場において「思考ツールの活用」に取り組んだ。また、授業の終末場面においては、何を振り返るのが明確になるよう「振り返りの視点の提示」を行うこととした。これらの取組によって、思考過程の可視化と振り返りを行い、児童の「学びを振り返る」手立てとした。

- ③ 児童の最初の考えと他者との協議後の考えを比較できるようなワークシート等を用い、考えの変容が見取れるようにする。
- ④ 振り返りの場面において、学習内容だけでなく、資質・能力についての自己評価も行うことで、「つながり合う力」を意識できるようにする。

本単元においては以下の取組を行う。

(3) 視点3「学びを支える」について

児童の考えが広がったり、深まったりするためには、グループでの協議などにおいて、多様な意見が出され、それらの意見から収束に向かうような議論が行われることが望ましい。そこで、話合いの際に、話し合う目的や方法を明確にすることで、グループ

協議などの言語活動が行われやすくするようにした。このことにより、学びのUD化が図られ、他者との協働によるよさが実感できるようにし、「学びを支える」手立てとした。

本単元においては以下の取組を行う。

- ⑤ 児童が学習内容だけでなく、学習活動の方法まで把握できるよう、相談しやすい雰囲気づくりに努めることで、日常的にも学級内での「つながり合う力」の育成を図る。

3 「つながり合う力」の検証

(1) 検証の内容

今回、国語科の授業における学習活動を通して「つながり合う力」を育むことを目的とする。ここで「つながり合う力」を本研究では次のように捉える。

「自分の考えを言うこと」
「友達の意見を聞くこと」
「友達と助け合うこと」の三つの姿

この姿について、課題発見・解決の過程の中で行われる「主体的・対話的で深い学び」による児童の意識の変容を見取ることで「つながり合う力」が育まれたかを検証していくこととする。

(2) 検証の方法

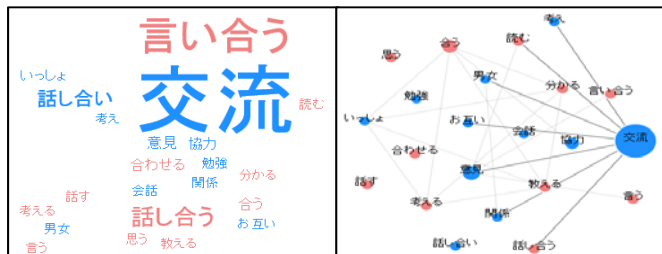


図1 自由記述による結果

まず、『「つながり合う力」を備えた姿とはどのような姿か』について、自由記述による児童の概念を見取ることとした。(図1)

テキストマイニングによる分析と児童の実態を踏まえ、研究協力員との協議により、「つながり合う力」を備えた姿として児童にも分かり易く共有化できるよう上記(1)の三つの姿としてまとめた。

「主体的・対話的で深い学び」による児童の意識の変容を見取る意識調査について、研究協力員の学校においては、「全国学力・学習状況調査」の児童生徒質問紙調査を活用した質問紙調査を検証授業の前後に実施し、この結果を比較することとする。その結果の変容を分析することで今回の研究を検証する。

4 研究の実際

検証1 小学校第5学年

単元名 明日をつくるわたしたち

(1) 本単元の授業設計

① 児童の実態から

学習内容の定着について、熊本県学力調査の結果から実態を見取った。「国語への関心・意欲・態度」、「話す・聞く能力」については県平均を上回っているものの、「書く能力」については、やや下回っており、特に「自分の考えが明確になるような見出しを書くこと」の定着率が73.2%と、県平均より10%近く低かった。また、前単元の「次への一歩―活動報告書」では、教科書の例を参考にしてすべてのグループが報告書を仕上げることができたが、「推敲」の時間を活かしてよりよい文章に練り上げるまでには至っていなかった。

一方で学び方については、「授業の中で新しい問題や課題に出会ったときに、それを解いたり、解決したりしてみたい」と考える児童が多く見られ、主体的に学ぼうとする児童の割合は高い。しかし、「課題を解決するときには別の方法はないか思考したり、複数の方法を考え、その中から選択したりすること」については、約半数の児童があまりできていないと考えており、課題が見られる。

これらのことから、課題を解決する際に、グループでの学習活動を取り入れ、解決方法を協議することで「書く能力」と「つながり合う力」の育成が図られると考える。

② 単元観

本単元は、「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の複合単元である。小学校国語科学習指導要領「話すこと・聞くこと」の目標を受け、よりよい暮らしのために自分たちにできることやしたいことを考え、自分の考えを明確にした上で、グループで計画的、協力的に話し合うことを一つのねらいとしている。

また、「書くこと」の目標を受け、グループで話し合い、考えたことが伝わるように工夫して「提案書」を書くことを、もう一つのねらいとしている。

これらのことから、本単元において、一人一人の考えを生かした質の高い話し合いや提案ができるか

について学習することは、これからの社会に求められる資質・能力として設定した「つながり合う力」の獲得にもつながり、本校の学校教育目標の「育ち合い、成長し合う集団の育成」及び目指す児童像の「自ら学び、考え、工夫する」の実現につながるものであると捉える。

③ 単元の目標

単元の目標	身の回りの問題について調べたことをもとに、自分の考えを明確にして話し合い、その解決のための提案書を書くことができる。
国語への関心・意欲・態度	①身の回りの問題について調べ、解決のための提案書を書くということに関心を持ち、問題に関する情報を集めたり、自分の考えをまとめたりしようとしている。
話す・聞く能力	①収集した知識や情報を関連付けて話し合っている。(ア) ②話題に対する自他の考え方・感じ方の違いを踏まえ、計画的に話し合っている。(オ)
書く能力	①題材に関する情報収集の方法を知り、幾つかの方法を用いて情報を集めている。(ア) ②提案書の構成を明確にして、書いている。(イ) ③事実と感想、意見を区別して、目的や意図に応じて提案書を書いている。(ウ) ④書いたものを読み合い、よりよくなるよう推敲している。(オ)
言語についての知識・理解・技能	①言葉から受ける感じや、言葉の使い方について関心を持ち、説得力が増すように表現を工夫している。(イ)(カ)

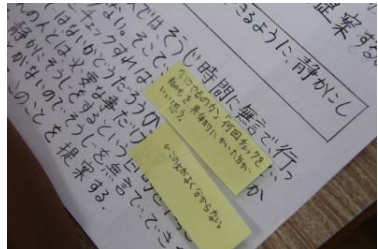
④ 単元計画

単元を貫く問い：学校や地域をよりよくするための提案書をまとめ、運営委員会に提案しよう。

次	時	学習活動	研究の視点との関連
一	1 2 3	1 身の回りにある問題について考え、話し合う。 2 学習課題を設定し、学習計画を立てる。 3 自分の取り上げたい問題について情報を集めて、自分の考えをまとめる。	視点1【学びを引き出す】 ①提案書を書いて、学校をよりよくしようとする目的・相手意識を明確にする
二	4 5 6 7	4 提案する問題について、グループで話し合う。 5 決まった問題について、さらに資料を集め、提案書に書く内容を整理する。	視点2【学びを振り返る】 ③学習前・後半による考えを比較することで、自分の変容に気付けるようにする。 ④二項軸を用いたワークシートを活用し、考えた観点によって視覚化できるようにする。
三	8 ～ 12	6 提案書を書く。 (1)書き方を確認し、構成メモを作る。 (2)分担し、記述する。 (3)推敲する。 【本時】	視点3【学びを引き出す】 ②比較できる例を示すことで、課題を焦点化する。 視点1【学びを振り返る】 ④付箋を使ったり、ワーク

		(4) 清書する。	シートと同様に板書をまとめたりすることで考えを視覚化する。
四	13 14	7 提案書を読み合う。 8 提案する。	視点1【学びを引き出す】 ①提案したことが実現することでどのような効果があるのかを示し、よりよい暮らしのためにできることを更に考える。

(2) 指導の実際

過程	学習活動
導入	1 本時の目標（めあて）を確認する。 学習目標（めあて） 提案書を推敲して、よりよくしよう。
展開	2 [課題]について話し合う。 今日一番のポイントを見付け、推敲に生かそう。 (1)推敲するときの観点を確かめる。 【視点1】学びを引き出す 比較できる例を示すことで推敲のポイントについて押さえ、課題を焦点化する。 (2)提案書をペアで交換して読み合い、推敲の観点に沿って修正が必要なところを付箋に書く。  (3)読んでみて、修正した方がよいと思ったところを伝え合う。 (4)助言を参考にして、元の班で提案書を推敲する。  付箋に書いてもらった助言って、どういう意味なの？（助言の意図について確かめ合う児童）
整理	3 学習したことを振り返る。 ○本時の学習や単元の目標についての振り返りを書く。 ○推敲の様子について気づいたことを紹介し、前単元との伸びを感じられるようにする。

(3) 検証結果と考察

本実践の検証結果とその考察について、研究の視点による「学び」の充実からの観点と、学習内容の習熟及び資質・能力の育成の観点の2点について述べる。

① 研究の視点からの「学び」の充実について

ア 研究の視点1について

表1は、「学びを引き出す」に関わる学びの様子について見取る質問紙調査の結果である。課題意識が高まったり、他者との協働によって解決に向かったりした意識について調査している。

有意確率が顕著に認められたのは、「自分たちで課題を考えたり、解決したりする方法を工夫して取り組むことがある」であった。本実践における単元全体での「自分たちで課題を考える」活動は、地域や学校生活での課題を発見することであった。一単位時間においてのそれは、「提案書を書くために必要な能力」についてであった。この単元全体と一単位時間ごとの課題を考える活動が充実していたことが分かった。

また、「解決したりする方法を工夫して取り組む」については、毎時間の児童同士による協働的な学習によって課題解決が図られており、そのことが充実していたことが分かった。

つまり、研究の視点1「学びを引き出す」による「社会に開かれた教育課程」の側面を取り入れた学習課題にすることや、毎時間の「書く能力」に関する課題の焦点化により、課題を考えたり、解決方法を工夫したりする学習が充実したと考える。

表1 学び全体の変容 (n=20) 4件法

有意確率**<0.01 *<0.05

	質問	事前	事後	有意確率
学びを引き出す	自分は、先生の話や他の人の発表を聞いて、国語がおもしろくなったと思う。	2.619	3.150	0.007**
	授業の中で、先生や友達に質問されたりアドバイスされたりすることによって、自分の考えが広がったり深まったりしている。	3.286	3.200	0.374
	授業の中で、自分たちで課題を考えたり、解決したりする方法を工夫して取り組むことがある。	2.952	3.450	0.004**
	自分は、新しい問題や課題に出会ったときに、それを解いたり、解決したりしてみたいと思う。	3.381	3.600	0.117

イ 研究の視点2について

表2は、「学びを振り返る」に関わる学びの様子について見取る質問紙調査の結果である。身に付けたことを他の学習へ活用したり、学んだことを振り返ったりした意識について調査している。

有意確率が顕著に認められたのは、「国語の授業を通して知ったこと、できるようになったことを、他の授業やふだんの生活の中で活用できないか考えている」である。本実践における単元全体での「活用できないか考えている」活動は、単元終末の「次に生かしたいこと」に関する自由記述による感想を書かせた活動であった。一単位時間においてのそれは、毎時間の終末における授業を振り返る活動であった。この単元全体や一単位時間の終末に振り返る活動が充実していたことが分かった。

表2 学び全体の変容 (n=20) 4件法

有意確率**<0.01 *<0.05

	質問	事前	事後	有意確率
学びを振り返る	自分は、国語の授業を通して知ったこと、できるようになったことを、他の授業やふだんの生活の中で活用できないか考えている。	2.857	3.350	0.001**
	自分は、国語の授業で学習したことは、これから、社会に出たときに役に立つと思う。	3.619	3.550	0.289
	自分は、グラフや表などの資料や文章、公式や定理などを、自分の考えを持つために役立てている。	3.095	3.150	0.402
	自分は、授業で何を学んだかだけでなく、何を知ったか、何ができるようになったかを振り返っている。	2.952	3.250	0.092

単元終末の「次に生かしたいこと」の自由記述による感想を分類したのが表3である。国語の「書く能力」に関する記述が多い中で、後に述べる「つながり合う力」の要素に関することや、「地域の取組に関すること」について記述している。振り返りによって、一人一人が振り返る内容は、多様であることが分かった。

表3 単元終了後の「次に生かしたいこと」(自由記述) (n=20) ※重複あり

項 目	人数
提案書の書き方に関すること	10
自分の考えを言うことに関すること	6
友達と協力し合うことに関すること	5
地域の取組に関すること	1

ウ 研究の視点3について

表4は、「学びを支える」の「学習内容や学習方法を把握しやすいよう相談しやすい雰囲気づくり」に関する調査結果である。

「つながり合う力」の要素である「自分の考えを言う」「友達の意見を聞く」「友達と助け合うこと」のどれが一番身に付いたかについての質問紙に対して、20人中15人が「友達と助け合うこと」と答えている。このことから、単元の学習を通して、特に「友達と助け合うこと」についての意識が高まったことが分かる。

表4 「要素のどれが身に付いたか」（選択）
(n=20)

項 目	人数
自分の考えを言う	1
友達の意見を聞く	4
友達と助け合う	15

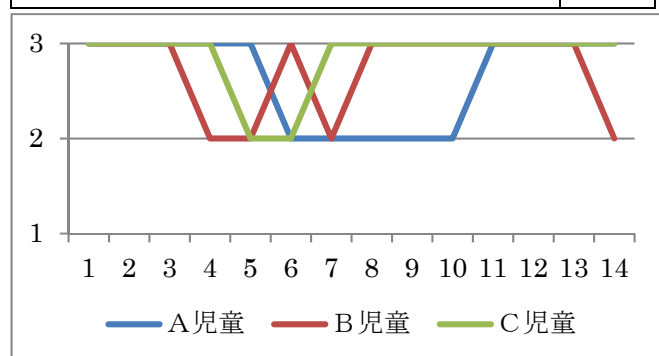


図2 「自分の考えを持つこと」抽出児の推移

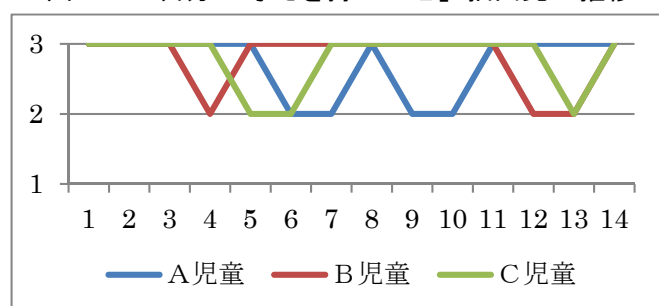


図3 「友達の意見を聞くこと」抽出児の推移

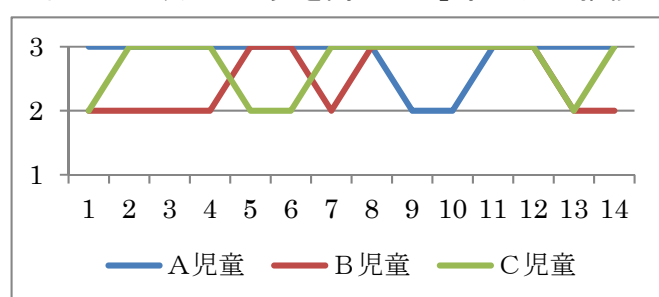


図4 「友達と助け合うこと」抽出児の推移

図2～4までの三つのグラフは、学習の習熟度により3人の児童を抽出し、それぞれの3段階の自己評価の推移を示したものである。A児童・B児童・C児童のそれぞれの習熟度は低・中・高となっている。

A児童が第6時から第10時まで、「自分の考えを持つこと」について比較的低い評価となった。それぞれの時間の学習活動が「資料を集める」「構成メモを作る」「下書きをする」となっているが、第9時、第10時について「友達の意見を聞くこと」「友達と助け合うこと」についても自己評価が低いことから、自分で記事を書くことを苦手としたことが分かる。ただし、第11時の本時の推敲を行った学習では、「ペアの人に提案書を『こうすればいいよ。』と教えてもらったので、清書ではよりよく書ければいいと思います。」という学習の振り返りをしており、他者との協働による問題解決のよさを感じ取っていることが分かる。

B児童は、「友達と助け合うこと」に関して第1時から第4時まで自己評価が比較的低かった。その時間の感想には、「提案することを決めるときに時間内に決められなかった」など、グループでの話し合いがうまくいかなかったことを述べている。しかし、単元終了後に行った学習の振り返りで「心に残った活動」については第9時、第10時における下書きをする学習活動のことを取り上げており、理由にも「分担して、文章を考えたから」と、友達と助け合うことのよさを感じ取っていることが分かった。

C児童は、第5時、第6時において自己評価が比較的低くなっている。しかし、第7時においては、「ペアの人と協力して解決方法をたくさん見付けたり、調べたりすることができた。」と感想を述べており、協力し合う活動のよさを感じ取っていることが分かった。

これらのことから、習熟度の程度に関わらず、分担する、たくさん見付ける等の「学習方法、目的」を明確化したり、「相談しやすい雰囲気づくり」を行ったりする「学びを支える」手立てを行うことで、自分の考えを持つことができたり、協力したりすることができ、学習活動全体が充実することが分かった。

② 「学習内容」の獲得について

本時において学習した「推敲」に関する指導事項は、「目的や意図に応じ、必要な内容を適切に書き加える」ことであった。この指導事項に関する学習内容の定着を図るために、全国学力・学習状況調査の過去問題を使用した。結果を表5に示す。

表5 全国学力・学習状況調査の過去問の平均正答率 (n=20)

指導事項	問題	本校の平均正答率 (%)	全国の平均正答率 (%)
表現の効果について確かめながら物語を創作する	H24年度 A 6	70.0	72.1
目的や意図に応じ、必要な内容を適切に書き加える	H25年度 B 2一	75.0	64.0

表5の結果から、本時で取り扱った「推敲」に関する指導事項において、全国の平均正答率と比較しても十分な力を発揮していることが分かる。一方で、表現の効果について確かめる指導事項については、全国の正答率より低い結果となった。これは、文種が物語ということもあり、学習したことと完全に整合しないためと考えられる。この結果から、「表現の効果」については課題が残るものの、指導の中心とした「推敲」に関する学習内容の習熟も図られたと考える。

また、前述の表3の「次に生かしたいこと」における自由記述の質問紙調査においては、20人中10人が「具体的に書くこと」など「書く能力」に関することを記述していた。

これらのことから、単元を通して取り組んだ研究の三つの視点により、「書く能力」に関して、推敲する技能も高まり、書くときに気を付けたいという意識も高まったことが分かった。つまり、「学習内容」に当たる書く能力の獲得につながったと言える。

③ 「つながり合う力」の育成について

今回の研究の目的である「つながり合う力」を育むことに関し、意識調査の結果を表6に示す。

表6 質問紙調査結果 (n=20) 4件法

質問	平均
自分は「自分の意見を言うこと」ができたと思う。	3.50
自分は「友達の意見を聞くこと」ができたと思う。	3.80
自分は「友達と助け合うこと」ができたと思う。	3.85
みんなは「自分の意見を言うこと」ができたと思う。	3.35

みんなは「友達の意見を聞くこと」ができたと思う。	3.65
みんなは「友達と助け合うこと」ができたと思う。	3.80

表6の単元終了後の調査結果を見ると、どの質問事項においても高い数値となっている。その中でも特に数値が高いのは「友達と助け合うこと」に関する項目であった。理由に「一人では分からないことも三人だと分かるようになったから」や「友達と助け合えば、分からないことも解決する」、「自分は分からないことばかりで一人で悩んでいたけど、グループの人が教えてくれた」などを挙げている。

また、研究の視点1及び2と関連した質問紙調査による結果では表7の結果となった。どの項目においても高い数値となっているが、ここでも「友達と話し合う活動」が比較して高い数値となった。

表7 「友達と助け合うこと」と研究の視点による学習活動との関連 4件法 (n=20)

質問	平均
それぞれの活動は、「友達と助け合うこと」ができるようになるために役立った。	
考えてみたくなる課題【研究の視点1】	3.65
課題解決のために友達と話し合う活動【研究の視点1】	3.75
考えをまとめるための図【研究の視点2】	3.60
授業のまとめをしたり、振り返ったりする活動【研究の視点2】	3.70

これらのことと前述①②で述べたことから、「主体的・対話的で深い学び」が充実し、「つながり合う力」の要素として設定した「自分の考えを言うこと」「友達の考えを聞くこと」「友達と助け合うこと」についての意識が高まっていることが分かった。さらに、グループでの学習活動において、友達と助け合うことができたことによって特に「友達と助け合うこと」が高まったことが分かった。つまり、それぞれの要素が高まったことから、児童の「つながり合う力」は高まったことが分かった。

5 研究のまとめ

今回、小学校国語科では、研究の視点によって「主体的・対話的で深い学び」の充実を図り、「これからの社会に求められる資質・能力」として設定した「つながり合う力」の育成につながったかを検証した。

(1) 成果

これまで述べてきた前述「4の(3) 検証結果と考察」により示した表1及び2の学び全体の変容を「主体的な学び」「対話的な学び」の2点で整理し直した

ものが表8である。このことから、研究の視点による取組により、学んだことを次に生かそうとする「主体的な学び」、他者との協働による「対話的な学び」が充実したと考える。

表8 学び全体の変容 (n=20) 4件法

有意確率**<0.01 *<0.05

	質 問	事前	事後	t 検定
1	自分は、国語の授業を通して知ったこと、できるようになったことを、他の授業やふだんの生活の中で活用できないか考えている。【主体的な学び】	2.857	3.350	0.001 **
2	自分は、授業の中で、これまでの学習や経験を活かして自分の考えを持つことができている。【主体的な学び】	2.905	3.500	0.007 **
3	自分は、新しい問題や課題に出会った時に、それを解いたり、解決したりしてみたいと思う。【主体的な学び】	3.381	3.600	0.117
4	自分は、他の人の意見を聞いて、よいところを取り入れたり、改善点を言ったりしている。【対話的な学び】	2.810	3.200	0.044 *
5	授業の中で、先生や友達に質問されたりアドバイスされたりすることによって、自分の考えが広がったり深まったりしている。【対話的な学び】	3.286	3.200	0.374
6	授業の中で、自分たちで課題を考えたり、解決したりする方法を工夫して取り組むことがある。【対話的な学び】	2.952	3.450	0.004 **

また、調査問題や意識調査の結果により学習内容が身に付いたことも分かった。児童に「つながり合う力」の要素として設定した「自分の考えを言うこと」「友達の見解を聞くこと」「友達と助け合うこと」についても、身に付いたと実感する児童が増加したことにより、それぞれが高まったことが分かった。特に、資質・能力は、研究の視点1「学びを引き出す」における「学習活動を生む問いの工夫」及び視点2「学びを振り返る」における「振り返りの視点」により獲得につながったと考える。このことから、学習内容と資質・能力の獲得による「深い学び」が充実したことが分かった。

これらのことから、研究の視点「学びを引き出す」「学びを振り返る」「学びを支える」の取組により、「主体的・対話的で深い学び」を充実させることで、資質・能力を育成することができることを明らかにすることができたと考える。

(2) 課題

「社会に開かれた教育課程」となるように、学習

内容を「地域の課題を解決する提案書を書くこと」に設定した。実際に読んでいただいた保護者の方からの感想には次のようなものがあった。「よりよい暮らしのために、子供たちが考えた提案書を見て、まず素晴らしいと思いました。当たり前のようなことも意識し、取り組むことでますますよりよい学校生活及び社会生活が送れるようになると思います。一人一人が考え、意識して行動できるように頑張ってください。親の私たちももちろん頑張ります。」

よりよい地域になるための助言を感想に述べている一方で、地域社会を共によりよくしようとすることも述べている。学習したことが地域の一員である保護者に働きかけた結果だと考える。今後は、このように国語科に限らず、教育課程全体を見通して、地域創生の鍵となるような教育活動を工夫することにより、効果的な学習の展開も考えられる。「問いの工夫」と併せて考えていきたい。

また、「主体的・対話的で深い学び」についての「深い学び」について、今回は「学習内容」の獲得と捉えた。しかし、「学習内容」を全員が獲得するという量的な面だけでなく、一人一人の理解の質などについて、国語科の能力に関する文献研究と併せて、今後検討する必要があると感じた。

《引用・参考文献》

- ・小学校学習指導要領解説 国語編
- ・次期学習指導要領改訂にむけた「審議のまとめ」
- ・全国学力・学習状況調査 過去問題及び質問紙調査